

小野寺史郎著

## 中国ナショナリズム

民族と愛国の近現代史

〈中公新書、二〇一七年六月、二八〇頁〉

中国の現在は、鄧小平の言った「養光韜晦」から「大国崛起」へと舵を切り、新たな国際社会の盟主としての自己主張が垣間見える。世界第二の経済大国となったこと、それを北京オリンピック、上海万博といった国際イベントを華やかに演出し、さらに軍事的にもジブチなどに関与を深め、「一帯一路」を掲げることなどを通じて明らかに、世界に覇を競い始めている。

本書は、そうした中国の現状を近代史の上から理解しようとする際の好著である。近代とは「国民国家」の時代であり、イデオロギーとしてのナショナリズムが人びとを結びつけ、また競争もしてきた。中国自体は、アヘン戦争以降、強引に近代世界システムに組み込まれ、国民国家形成を志向する

「革命」勢力、排外主義勢力、守旧派など錯綜する政治社会状況を出現させてきた。そして、清朝という旧来のゆるやかな統合体であった「帝国」の解体後、さまざまな葛藤をへて、現在の「中華復興」に至っている。その際、常に「中華帝国」の幻影がナショナリズムの上につきまとい続けている。

著者は、そうした近代中国ナショナリズムの歴史を、①上からの公定ナショナリズムか、②西洋近代志向か、伝統文化志向か、③漢人中心の単一民族国家をめざすか、多民族性を強調するか、④ナショナリズムの「敵」と位置付けられるものは何か、の四つを「参照軸」として、清朝末期から民国期、そして中華人民共和国においても毛沢東時代、改革開放以後現在というように、時代順に「中国ナショナリズム」を検討している。時代区分や「参照軸」としてあげた四点は、理解し易い目印であり、これまでの一般的な整理のやり方と大きく違うところはない。

しかし、「ここ二〇年ほどの間、中国近現代史研究で積み重ねられてきた中国ナショナリズム研究の概要」を示すことに本書の主眼があり、脱イデオロギーの中で進められてきた研究の成果が、網羅している訳ではないが、要領よくまとめられ、紹介されている。一例を挙げれば、松本ますみ『中国民族政策の研究』（一九九九）、小野寺史郎『国旗・国歌・国慶』（二〇一一）、深町英夫『身体を驕げる政治』（二〇一三）、藤谷浩悦『湖南省近代政治史研究』（二〇一三）、丸田孝志『革命の儀礼』（二〇一五）などである。ただし、個別の研究から総合あるいは理論化によって全体像を描き出そうとする道は険しい。とはいえ、広範な研究を整理し、初学者に提示しようとした作業は、多いに評価できるのではないだろうか。

（三好章）